



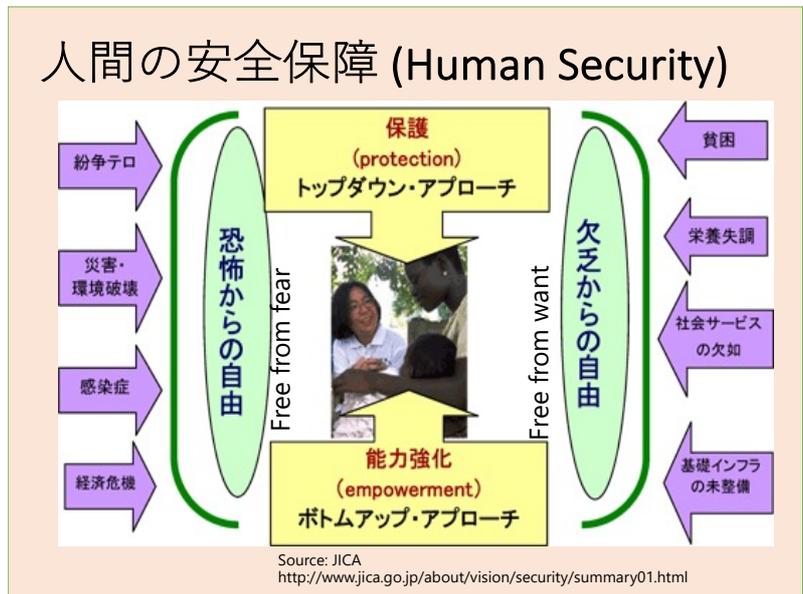
現在の世界情勢とこれからの国際協力

独立行政法人国際協力機構(JICA)北陸センター 所長 米山 芳春

2021年、世界では様々な出来事が起きました。前年から続く新型コロナウイルスの大流行に加え、ミャンマーやアフガニスタンでは、軍部やタリバンが政権を握るといった政変がありました。また、日本国内では、外国人技能実習生の困窮などが大きな問題となっています。開発途上国の社会経済開発を支援する政府開発援助(ODA)に携わる者として、このような世界と日本国内の現状に対しては、大きな衝撃を持って受け止めるとともに、これからの国際協力の在り方を考えなおす契機にすべきと感じています。

2015年に定められた開発協力大綱には、ODAの基本方針のひとつとして「人間の安全保障」の推進が掲げられています。「個人の保護と能力強化により、恐怖と欠乏からの自由、そして幸福と尊厳を持って生存する権利を追求する」という「人間の安全保障」の考え方は、日本のODAの重要な柱です。しかし、果たして世界は、この理念の実現に向かっているといえるでしょうか？

新型コロナウイルスの世界的大流行は、「人間の安全保障」への大きな脅威となりました。感染症など公衆衛生危機への備えは、今までもWHOや日本のODAの重点テーマでしたが、改めてその重要性和国際社会が協力する必要性が認識されたと思います。JICA



は、昨年「世界保健医療イニシアティブ」を発表、「世界の命を守る」ことを掲げ、予防、警戒、治療に対する包括的な取り組みを世界各国で展開しています。日本は、コロナ禍の今こそ、災害や感染症に強い社会づくりにおいて世界をリードし、「人間の安全保障」の実現をけん引していくことが求められると思います。

内容

- 巻頭言 (1)
- スタッフ自己紹介 (3)
- ミドルリーダー/マネジメントコースだより (6)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (17)
- 合同カンファレンス/ラウンドテーブル報告 (20)

ミャンマーやアフガニスタンでの政変は、「人間の安全保障」への脅威に加え、インド太平洋地域の平和と安定、そして民主主義、「法の支配」、「基本的人権の尊重」などの普遍的価値の共有といった日本の外交政策の観点からも、衝撃的な出来事だったと思います。日本を含む国際社会が民主化の努力を支援してきた両国の政治体制は、一夜にして大きく変わりました。今後、米中対立の構図のなかで、この両国を含めた地域の安定と普遍的価値の共有をどう進めていくのか、日本にとって難しい課題が突き付けられていると考えています。

このように現在の世界情勢は、ODA の理念の実現に大きく立ちはだかっていますが、それでも一步一步、理想の世界を目指して取り組みを続けていくことが JICA の役割だと考えます。JICA は、「信頼で世界をつなぐ」とのビジョンの下、「人間の安全保障」と「質の高い成長」の実現を目指して事業を展開しています。目指す世界の実現のためには、パートナー国との信頼関係がその根底として必要ですが、そのためには、政府のトップから草の根交流まで、あらゆるレベルにおける信頼関係の構築が重要だと考えています。

そのためのひとつの方策が、研修員や留学生の受入です。研修員や留学生に技術やノウハウを教えるだけではなく、日本や受入地域への理解を深めてもらうことが、親日・知日人材を増やしていくことにつながります。

JICA世界保健医療イニシアティブ



また、日本国内の外国人実習生などの窮状にも目を向け、来日したすべての外国人の信頼を裏切らない社会をつくることも重要だと思います。海外での事業だけでなく、日本各地におけるそれら地道な取り組みが、いずれ大きなうねりとなって「信頼で世界をつなぐ」というビジョンにつながっていくのではないのでしょうか。

JICA 北陸は、研修員や留学生の受入、草の根技術協力事業、JICA 海外協力隊、民間連携事業など、様々な事業を通じて、北陸地域と開発途上国の結節点の役割を果たしています。また、出前講座などを通じて、北陸地域の国際理解教育や多文化共生にも貢献していくつもりです。地方自治体、大学、民間セクター、NPO、市民、北陸地域のあらゆる人達と手を携えて、北陸と世界が信頼でつながり、共に明るい理想の未来に向かうよう努力していきたいと考えています。



スタッフ 自己紹介

福井大学連合教職大学院 准教授 上田 晴之



今年度より福井大学連合教職大学院スタッフとして参加させていただきます。上田晴之です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、平成14年に福井大学を卒業し、その後私立幼稚園、公立小学校の非常勤などを勤務し、平成17年より福井市公立幼稚園の教員として勤務をしております。そして、平成30年度より、福井大学教育学部附属幼稚園に勤務することになり、教職大学院でもミドルリーダーとして学ぶ機会を得ることができました。

私が幼稚園の教員になろうと思ったきっかけは、福井大学3年生の時、授業の中での保育体験です。私は小学校教員養成課程の家庭科専攻でしたので、家庭科の授業の中に保育体験が入っていました。その中で、一日一日子供たちが成長していく場面に出会います。3～4歳の子供たちが自分のところに嬉しそうに寄ってきます。一緒に遊ぶと大いに喜び、食事や排泄などのお世話をしていくと、人間の進化の過程を見ているようでした。担当の先生もとても優しく素敵な方で、子供の姿、保育士の姿、園の雰囲気などを体験して、毎日が楽しくて仕方なくて、実習が終わってからすぐに保育士の資格を取るための手続きをしているぐらい衝撃でした。

まだ、そのころ男性保育士はほとんどいなかった時代です。ちょうど「保母」から「保育士」に名称が変更されたのが平成11年です。最初は家族の反対

を受けましたが、たくさんの方に相談し、ご縁もあり、幼児教育の世界に飛び込むことができました。

幼稚園の教員になってから約20年、たくさんの子供たちと先生方と過ごしていく中で、充実した日々を過ごしております。

そして、教職大学院にかかわるようになってからは、今までの自分の経験を省察する機会が多くあり、保育観が揺さぶられ、より広い視野で幼児教育というものを改めて捉えなおすことがよくあります。それは、教職大学院のカンファレンスの中で、異校種の先生方、ファシリテーターの先生方と語り合う中で、多様なご意見をいただき、また幼児教育を異校種の先生方に言葉として伝えていくために、いかにわかりやすく、具体的に、など重層的に考えていく作業自体が自分にとって幼児教育を俯瞰的に見つめるきっかけにもなっています。

カンファレンスの中で、幼稚園での遊びを紹介した時に中学校の先生から「遊びの中の偶発的な部分が面白いよね」と言葉をいただきました。幼稚園の好きな遊びの中には、教師の思いのもと環境を意図的に構成しながら、子供たちがその遊びを自発的に遊べるように誘発していく部分も多くあります。私はどちらかというと、教師主導で、意図的に遊びを構成していくタイプでした。

しかし、教師が意図していないところでの遊びももちろん多くあります。その偶発的な遊びの中にこそ子供たちの能動性が詰まっており、教師はその遊びの核となる部分を読み取り、必要ならば寄り添い、認め合い、周囲に広げていきます。子供たちなりに周囲の環境に多様に出会い、子供たちなりに遊びの中で試行錯誤したり、協同したりしながら、そのものの

面白さ、不思議さに夢中になっていくことが大切だということに改めて気付かされました。カンファレンスでのご意見を通して自分なりの保育観が揺さぶられた瞬間でした。

幼児教育は、小中高と学びを進めていく原点です。学びの芽生えが詰まっているのが幼児教育だと思っ

ています。いかに幼稚園で土壌を耕し、芽吹かせていくか。そのためにどのような幼児教育を展開していくべきなのか。小中高と見通しを持ちながら、幼児教育を進めていきたいと思うと同時に、教職大学院の中で、たくさんの先生方と語り合いながら、幼児教育について紹介し、学び合いたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院 准教授 森川 禎彦



附属義務教育学校に赴任して5年目になり、本年度は統括研究主任を仰せつかっております。本年度より、教職大学院のスタッフの一員として、学校現場に軸足を置きながら携われることに大きな喜びと責任を感じています。

この5年間、常に「附属学校の存在意義」について考えてきました。文部科学省における国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議（第4回）の配布資料において、本学の松木健一副学長は、「医学部の附属病院が廃止等で取りざたされることはない。高度専門職業人の育成に欠かせないからである。ところがどうだろう。国立の教育学部の附属学校については、縮小や廃止の論議が出てくる。これは、教育学部が職業人教育としての教育研究をしていないからであり、附属学校が職業人教育としての役割を果たしていないからではないか。」と書かれています。まさしく附属学校の在り方を問うものであり、我々附属学校に関わる者に突きつけられた命題であると考えます。

本校の使命の一つに、「教育研究学校として時代の要請に応えるべく、県内公立学校や行政機関、大学と協働して、学校段階間の円滑な接続をはじめ新たな

教育課題の解明に向けて、理論を構築し、実践研究を重ねて広く成果を発信しながら時代をリードする学校」であることが明記されています。しかし、現状はその使命に応えきれていないのではないのでしょうか。実際に、「公立学校でも役立つ実践をしているのか」「教育実習は公立学校でもできるのではないか」「大学附属であるのに大学と真に連携できていないのか」など附属学校に対するご批判をお聞きすることも多々あります。私は、このような批判を真摯に受け止めて向き合っていく必要があると考えています。そして、附属学校が職業人教育としての役割を果たすために、私は次の3つのことが重要であると考えます。

1つ目は、地域の学校教育への貢献です。今年10月末に、県内のある小学校の要請で本校の2名の教員が校内研究会に参加しました。「授業を1時間ずつの単発的なものではなく、単元全体で探究的に子供たちが学ぶものにしていくためにどのように授業をデザインしていくべきか」という悩みを抱えている先方に対し、本校の実践例を紹介し、具体的に単元をデザインしていくワークショップを行いました。最後には、先方の学校長から「こんなに楽しそうに研究会をしている光景を初めて見た」という評価をいただきました。このように、その学校の「困り感」に即した研究会を相談しながら創り上げ、講話や講義など一方的に教えに行くというスタンスではなく、共に学び合うという研究会にしていくことが重要であ

ると考えます。附属学校の研究を公のものにし、忌憚のない意見に耳を傾けることが公教育に対する責任です。今後もこのような要請を積極的に受け入れ地域に貢献する附属学校であるべきだと思います。

2つ目は、教育実習生への教育です。本校は、毎年9月に本学の学部生の教育実習生を受け入れています。指導内容は、教科指導を中心に各々の担当教員の裁量に任されています。例年は、研究主任として実習期間が始まる前に1回だけ講話する時間があります。しかし、本年度は、約3週間の実習期間中に3回ほど実習生に向けてお話をさせていただきました。内容は、「これからの教員に求められる資質・能力」「本校が大切にしている子供観や教育観」などです。実習生は、大学における教科教育での学びを実習で発揮しようとはしますが、なかなか上手くいきません。そこで、子供たちに対して実際に授業をしていく中での実習生の「困り感」を聞き、お話しする内容を考えました。即時役に立つという内容ばかりではありませんが、「困り感」を伴ったときにその都度話すことが重要であると考えます。また、本校の教員に対しても私がお話しした内容を紙面で共有し、実習生の指導に役立ててもらいました。このように、未来の教育者に対して、実習の中で自らの「子供観」「教育観」について省察していく機会をつくることが重要であると考えます。また、本校は教職大学院のインターンを多く受け入れています。インターン生も同様であると思います。

3つ目は、学校段階を超えた学び合いです。2年前の附属幼稚園・義務教育学校・特別支援学校合同研究会で、実践を語り合うグループに附属幼稚園の先生がいらっしゃいました。その先生の実践報告では、水遊びをしていた園児が、「なぜだろう」「不思議だな」という素朴な問いから遊びを探究し、学びをどんどん深めており、そこに丁寧に寄り添いながら支援する先生の姿が描かれていました。私は後期課程(中学校)の子供たちの学びの姿を普段目にはしていますが、この素朴な問いから始まる探究サイクルに学びの原

点を感じ、幼稚園から中学校段階までの学びのつながりを感じました。我々教師が目の子供たちに関わる時間は限られています。だからこそ、しっかりと次の学校段階へ「学びのバトン」をつないでいくことが重要であると考えます。そのために、教育の原点である保育園や幼稚園、そして特別支援学校、小学校、中学校、高校、大学、すべての学校段階での学びの在り方について、それぞれの学校の子供たちの学びの姿を中心にして、議論し合うことが必要なのだと考えます。そこで、子供はどのような存在であり、どのように学ぶのかという「子供観」と、どのような授業が子供の資質・能力を培うのかという「授業観」について議論し、実践へと具体化していくべきではないでしょうか。教職大学院の学びがそうであるように、附属学校としてその意義を広く発信していくべきであると考えます。

以上のように、附属学校の存在意義が問われる中で私見を述べてきましたが、特に3つ目は附属学校に限らずどの学校においても重要であると思います。つまりそれは、「子供たちにとってより良い教育はどうあるべきか」という正解のない問いに挑戦し続けることです。それぞれの学校で抱えている課題は多種多様です。その現状を踏まえ、学校の強みと弱みをしっかりと受け止め、教員が協働して学び合い、学校を変えていくために挑戦していくことが大切であると考えます。

本校でもこの5年間で「9年間の学びを貫く各教科の『協働探究カリキュラム』の作成」「『幼小スタートカリキュラム』の作成」「長期的な協働探究のプロジェクト型学習である新領域『社会創生プロジェクト』」「附属幼稚園・義務教育学校・特別支援学校の合同研究会」「子供たちと共に学びを語る研究集会」など様々な挑戦を行ってきました。

いずれもまだまだ道半ばの取組であり、今後も実践研究を積み重ねていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

ディカプリオ先生

—風土を作るために組織の中で自分のできることを探して—

学校改革マネジメントコース2年／越前市武生西小学校 **川端 宏明**

「先生の名前知ってる？」と言って漢字で名前を板書する。そして、「先生の名前は・・・」と言いながら漢字の横にカタカナで「レオナルド・ディカプリオ」と書く。「先生の名前はレオナルド・ディカプリオです。」と言うだけで、子どもたちには大ウケである。担任の先生が出張等で不在の時は、率先して補欠に入るようにしている。初めてそのクラスの補欠に入った時に行うのが、この自己紹介である。とあるクラスでこの自己紹介をした際、冗談と受け止めてもらえず、「へえ〜。」と信じられてしまった時は、外国籍児童が4分の1を占める本校ならではだなど妙に感心してしまった。ともかく、一度「なんか面白い先生」と認識してもらえればこっちのものである。

今年度教務主任になって、昨年度までと大きく変わったところは、ほぼ全ての学級に関わる機会が持てるようになったことである。新採用から20年間、ずっと学級担任をしてきた私にとって、はじめは自分の学級がないことに寂しさを感じていたが、今は特別支援学級も含めて1年生から6年生まで全ての子どもたちと関わるができることが楽しくて仕方がない。どの学年の子に会っても、「あ、ディカプリオ先生！」と呼んでくれ、小さい学年ほど距離感は近い。そうやって子どもたちとの距離感を縮めることで、子どもたちはきっと担任の先生には見せないであろう別の顔を見せてくれることもある。時には、「え？そんなこと話してくれるの？いいの？そんなこと話して。」とこちらがびっくりするような、生徒指導上の重要な情報を教えてくれることもあった。そのように、子どもたちとの何気ないやり取りの中で得た私なりの気づきや子どもたちの姿を担任の先

生に伝える。本校は、80名近い外国籍児童だけでなく、いろいろな面で気がかりな児童も多い。担任の先生一人ではとてもではないが、全てをカバーしきれない状況である。そのため、多くの眼で子どもたちを見、情報を共有しながらより良い支援を探っていくことが欠かせない。初めて自分が無担任という立場になり、これまでいかに無担任の先生方に助けていただいたか、また改めて全職員で全ての子どもたちを見るとはどのようなことかがわかったような気がする。子どもたちの気がかりな側面を見逃さず、支援の仕方を一緒に考えていくことも重要だが、特に今年度気がついたことは、子どもたちが頑張っている姿、素敵だなど思える行動や、子どもたちから得た私の喜びを伝えた時の担任の先生の嬉しそうな顔である。担任の先生方がいかに子どもたちに愛情を注いでいるかを感じることが多く、そんな先生方のために、少しでも助けになればと、また改めて思えるのである。実際、私が担任をしていた時も、無担任の先生から「〇〇さんがこんなことをしていました。」と教えてもらうことが何度もあったが、「こんなこと」の内容が良いことだと本当に嬉しく思えたり、何より大切なクラスの子どもたちの良い面を見てくれていたその先生の存在がありがたいと思ったものである。支援会議や教育相談に関する情報交換会など、公の場もちろん大切ではあるが、普段の子どもたちとのコミュニケーション、先生方とのコミュニケーションが重要であると思いつく思う。担任や無担任、または養護教諭や事務職員など、学校には多くの職員がいる。その職員同士が互いに助け合い、「子どもたちのために」と一つになれたとき、その組織は大きな

力を発揮すると信じている。それこそが、校務分掌図だけではわからない「風土」なのだと思う。

今私は、全ての子どもたちに等しく関わることができる無担任という立場を最大限に生かそうと思っている。「組織」などというものを、これまで明確に意識してきたことはなかったが、そういう意識を持つことができるようになったのは、教職大学院での学びが大きい。多くの先生方と、より良い学校組織の在り方について対話することを通して、まだまだぼんやりはしているかもしれないが、理想の姿とその

実現に向けて自分がどうあるべきかが見えてきたような気がする。これまで、カンファレンスやラウンドテーブル等で関わった多くの先生方に対して、感謝の気持ちでいっぱいである。本当にありがとうございました。

なんとなく思い付きで出た名前が「それ」だっただけで、何か特別な思い入れがあるわけではないのだが、今度改めてタイタニックでも見直そうと思う。そして、今度はディカプリオ先生ではなく、ちゃんと「川端先生」と子どもたちに覚えてもらおう。

学園創立 60 周年学園研修会を終えて

学校改革マネジメントコース 2 年 / カリタス小学校 城 恵美子

10 月 16 日、カリタス学園の創立記念日に学園専任教職員の研修会が開催されました。創立 60 周年を迎える 2020 年に向けて 2019 年に始まった研修会ですが、2020 年はコロナ感染状況悪化のため研修会は中止。2021 年まで持ち越され、ようやくクロージングデーを迎えることができました。

2019 年に掲げられたテーマは「使命を受け継ぎ未来を拓こう」～命の尊厳を伝える学園を目指して～でした。創立 60 周年を迎え、全職員がもう一度建学の精神に立ち返り、教育理念の下で園児、児童、生徒それぞれの成長段階に応じた実践的、体系的なカリキュラムによる一貫教育を考える一日となりました。

まず、午前中、2 つの分科会からの発表がありました。2019 年、「使命を受け継ぎ未来を拓く」ため、考えていく核となるため立ち上げられた 2 つの分科会、一つは使命継承委員会、もう一つは教育改革分科会です。

使命継承委員会は学園の宗教センターのスタッフを中心として各校種のメンバーで構成され、話し合いを進めてきました。私もこの分科会に属していましたので、2 年間に何度も話し合ってきました。事件のこともありましたから、精神的に相当きつい時期

もありました。しかし、お互いの話をじっくり聞くことにより、同じ思いをもって子どもたちの教育を行っているのだということがわかってとてもよかったです。当日は、一人ひとりが継承していきたいと考えていることを校種から一人ずつ出て語りました。カリタス学園で関わった人たちとの出会いから始まり、自分が受けてきた恵みを同じように周りに返していくこと、そして大切な使命を次の世代に引き継いでいきたいという話です。分科会として使命の継承を深めるために今後も学園、校種別にも、宗教研修を継続して実施していくという提案もなされました。

一方、その理念を土台に教育活動を展開していくことを確認し、一貫教育についても考えていくために立ち上げられたのが教育改革分科会です。その元になっているのは、知識基盤社会における学力育成構想委員会です。この長い名称の委員会メンバーは、福井大学の教職大学院の修了生及び現在通っている院生（教員）であり、そこに顧問として中高の校長先生が加わった 14 名です。これからのカリタスの教育を考えると、確実に大きな推進力になっています。ここから各校種 2 名ずつ計 6 名で構成されたのが、教育改革分科会で、学園の授業研究に関する情報交換、お互いの授業研究会への参加、学園研修会への提

案など、学力育成構想委員会のメンバーとも意見交換をしながら進めてきました。

印象に残っているのは2年前の研修会オープニングデーで、松木先生が「学園には教育理念がある。各校種で表現の異なりがあるのは分かるが、学園としての整合性がないように感じる」続けて「学園の理念の実現には、長期の学びのプロセスが重要である。長いスパンでの実践の語りと傾聴が必要。そういった取り組みをすることで、校種を超えた理念のつながりが見えてくるのではないかと話されたことです。理念に整合性がないという指摘を受けたことは衝撃でした。しかしこれは、メンバーでもう一度、教育内容を理念の視点から振り返るよい機会となりました。各校種の取り組みの中にあるカリタスの理念を見出し、各校種間でつながりがあるのだろうかと探っていきました。その結果、それぞれの校種の取り組みは一貫性を持っており、どれも共通の大切な理念の上にあることが確認できました。

ところで、学力育成構想委員会で話し合いを進めていた時に、中高の長谷川先生が、授業研究会の在り方が変わってきたことを報告してくれました。研究会ではICTを活用し、ロイロノート（クラウド型授業支援アプリ）を使って授業者への感想や意見を伝えることが行われていて、すべての教員からびっしり書き込みがありました。最近のグループの話し合いは雰囲気は格段に良くなって、教員みんなの姿勢が前向きに変わってきたとおっしゃっていました。小学校のメンバーは、みんなそれを聞いて驚きました。「福井大のラウンドテーブルやカンファレンスの在り方をなんとしても実現させたかったんですよ。絶対否定しない。とにかく聞く。あれいいですよ。そういう研究会にしようって呼びかけ続けたらみんなの態度も変わってきたんです。」生き生きとした表情で語る長谷川先生の姿に頼もしさを感じました。中高にも教職大学院の仲間が増えて、ほんの数年で確実に変わってきています。これからもどんどん変革していつてくれるでしょう。

10月のカンファレンスで発表してくれた西川先生がいる幼稚園にも新しい風が吹いています。モンテ

ッソーリ教育の充実・定着のため新しい取り組みが行われています。また現在、新校舎建設工事中で、子どもたちの、「見たい・知りたい・やってみたい」に応える環境になるようレイアウトが計画されているそうです。私の印象でも以前よりずっと開かれた園になってきたなと思います。園長先生が、「いつでも来て！見て行って！」と声をかけてくださいます。突然子どもたちの様子を見にお邪魔してもいつも歓待してくれます。保護者の参観も増えたそうです。教師間の連携や研究は様々なアイデアと工夫で進んでいることが伝わってきます。園児たちがよく小学校や中学校の敷地に出かける姿もよく見かけます。こうして幼稚園で主体性をもって体験したことが、小学校の総合活動にそして中高等学校の探究活動につながっていきます。

午後は卒業生5名によるパネルディスカッション、そして校種混合のグループ分かち合いなどがありました。卒業生のパネリスト一人一人の話は長くなるので詳しく書くことができませんが、カリタスでの学びと私の生き方というテーマで話され、どの方も立場は違うのですが、在学時に受け取ったカリタスの普遍的な価値、生きる座標軸のようなものは共通していることを再認識する場となりました。

校種混ざってグループでの分かち合いでは、今自分の使命と、一貫教育として行っていきたいことをそれぞれに語り聞きあいました。校種が違い、勤続年数が違い、教科も違い、何よりこの学校に招かれたきっかけがみな違います。それでもやはり共通して大切にしていきたいことは同じだと確信しました。

以上で、学園研修会のクロージングデーは終了しましたが、喜びと感謝にあふれる、未来への再出発の日となったと思います。変えられないもの、変わらず大事にしていきたいことがある一方で、時代の変化に合わせて改革していく勇気も必要だとあらためて思いました。これからも日々の様々な問題に直面するとき、ぶれない軸と時代の要請に合わせる柔軟性を併せ持ち、迷うこともたくさんあるけれど、お互いを尊重する心をもってみんなで考えていきたいと思っています。

子どもの心に寄り添う支援

学校改革マネジメントコース2年／羽島市立羽島中学校 大野 隆次

先日、ようやく修学旅行を実施することができた。「ようやく」と表現したのは、新型コロナウイルス感染症対策により、4月当初より何度も延期が繰り返され、行き先や日程の変更を余儀なくされた上での実施になったからである。現地では手指消毒、黙食を徹底するなどの感染症対策による制限された活動にも関わらず、子どもたちは笑顔で楽しく活動する様子に一安心した修学旅行となった。

さて、先日、羽島市内の小中学校、高等学校、特別支援学校の生徒指導主事の先生方や関係機関（警察署、羽島市役所・子育て健幸課、主任児童委員など）

を対象にした「生徒指導連携強化委員会」を主宰した。これは年に3回実施し、羽島市内の児童生徒の健全育成を目指し協議する会となっている。今回は2回目の実施となり、新型コロナウイルス感染症対策としてオンラインで開催した。今回の中心は、羽島市教育支援センターのいじめ対策・学校支援専門員のM先生のご講話であった。M先生は昨年度まで市内の中学校で校長をされた方である。内容は「いじめ・不登校の対応で今、大切にしたいこと」というもので、最近の記者発表資料や前任校で大切にされたことを中心にご講話いただいた。その中で、文部科学省が通知した「不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方」についての話があった。

1 不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方

(1) 支援の視点

不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味をもつことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。

【文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）令和元年10月25日より】

不登校または不登校傾向の子どもに直面すると、教員はそれを回避しようと、子どもが登校できるようにチームとして支援体制を整え、登校できるように努める。本校でも不登校傾向の生徒を多く抱えており、今、その中の一人を何とか教室に戻し、学級の仲間と学校生活ができるように支援を続けている。しかし、上記の通知を鑑みたとき、学校に行くことだけが目標やゴールではなく、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味をもつことに気付かされた。子どもが毎日登校することは当たり前ではなく、子どもの向こう側にある環境に思いを馳せ、不登校の子どもがいる家族の思いをより深く考えながら対応していくことが、子どもの心に寄り添う本当の支援であると理解することができた。今後

はそんな思いを念頭に置きながら、不登校生徒または保護者に対して、これまで通り寄り添い、管理職を含めた学校としてのサポートをしていきたい。

M先生の講話では、ご自身のお子さんとの関わりについての体験談を話される場面もあった。その中で、お子さんに語った「進路も大事だが、一番は『あなたが大事』」という言葉がとても印象的だった。不登校児童生徒に対する支援は難しい面もあるが、自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すことができるような子どもの心に寄り添う支援をしていきたい。

ボトムアップで進める学校改革

学校改革マネジメントコース2年／美浜町立美浜東小学校 大野 靖幸

福井大学教職大学院で学び始めて、早1年半が経とうとしている。この教職大学院に入学したきっかけは、当時の校長からの誘いではあったが、「行きたいです。」と即答したのを今でもよく覚えている。当時は教授法についての書籍を読んだり、研究会に参加したりして、一人で教育についての学びを深めようとしていたが、やはりそれには限界があり、行き詰まりを感じていたところだったからである。

入試以来、コロナ禍となり、福井大学に出向きカンファレンスを受けることは、一度もできていないが、これまでの1年半、オンラインではあるが、毎月のカンファレンスで、様々な年齢、職種、校種を超えて対話ができていることは、自分にとって貴重な時間になっている。

私は、現在学校改革マネジメントコースM2に在籍している。「つなぐ」というテーマを自分なりに設定しながら、個人研究を進めている。「つなぐ」には、「中学校につなぐ」と「ふるさと教育を通して、地域や他小児童とつなぐ」という意味がある。中学校につなぐでは、「自律した学び」を高学年のうちに習慣化させることで、学習面の中一ギャップを解消させる。その柱となるものが「自主学習ノート」である。高学年のうちにメタ認知能力を鍛え、それを自主学習に反映させる。漢字ドリルや計算練習などのやられる宿題からの転換を図っている。

私は、管理職ではないため、学校を管理している立場ではない。よってカンファレンスで同じコースの他の院生の先生方との対話の視点が異なり、ご迷惑をおかけするのではないかという気持ちも以前まではあった。しかし、どのカンファレンスでも、私の拙い話を傾聴してくださるとともに、話題提供に対して、いろいろな思いや考えを教えてください。毎日、家と学校との往復だった時間に、自分の教育観を高

める時間が加わっている教職大学院での時間は、自分のスキルアップのため大切なものになっている。

そのような中で、最近自分の心に響いたカンファレンスがあった。それは、松田先生が話された「トップダウン」と「ボトムアップ」の違いについてである。前述したように、私は「自主学習」で自律した学びを習慣化させたいと思いがあふ。そして、それをどう校内に広めていくのかについて試行錯誤している状況にある。教職大学院での実践も2年目になり、そういった取り組みは、教師や保護者間で少しずつ認められ、今では学校の研究推進重点事項に入れていただけるまでになった。そういった話をカンファレンスでした時に、松田先生が、「トップダウン」と「ボトムアップ」の話をしてくださったのである。「管理職の指示は、『トップダウン』である。それによって学校という場合は、変化していく。しかし、管理職でなくても学校は変えられる。自主学習のような取組をコツコツ続けていくことで、多くのものが賛同し、学校全体を動かす力に変わることがある。これは『ボトムアップ』である。」という内容のものであった。それを聞いたときに、自分のやってきたことは間違いではなかったという、この上ない充実感に満たされたのを今でもよく覚えている。自分のしてきたことへの充実感ではなく、「トップダウン」と「ボトムアップ」を対話によって融合させていくことが、今後の学校教育には重要であるということに気付かせていただいたことへの充実感だった。

学校改革マネジメントコースでの学びは、管理職でない私でも学校改革ができるという自信をつけさせてくれる場所になっている。教職大学院での学びも残り少なくなってきた。「つなぐ」のもうひとつの視点もさらに深めつつ、今後も様々なカンファレンスでの傾聴と対話から、いろいろなことを学び、

そして感じ、実践していくことで、子どもたちに教職大学院での学びを返していきたいと思っている。

教育行政職の立場からの学校改革マネジメント

学校改革マネジメントコース1年／嶺南教育事務所 山中 太継

昨年度より学校改革マネジメントコースの1年履修にむけて教職大学院で学び始め、今年度は2年目である。昨年までは中学校に勤務しており、教務主任として学校改革マネジメントに取り組んできた。その一つが主任会の立上げである。主任会では学年の連携を話し合ったり校内の問題について議論したりし、主任同士の横の繋がりを深めた。話し合ったことをきっかけに部活動の指導体制が見直され、超過勤務の時間が短縮されたり、生徒に付けるべき資質・能力の話し合いが進んだりし、学校改革が前に進んでいることを感じた。もちろん主任会を開くための時間の確保や、管理職との連携、取組を学校全体で進める困難さなどの課題はあった。その課題解決に今年度は取り組みたいと考えていた。また、教職員だけでなく生徒の主体性を伸ばすための生徒に向けた働きかけ、具体的には生徒自身が学びを省察し、教師や仲間と語り合い、見通しを持って次の実践をするというサイクルづくりにも取り組みたいと考えていた。しかし取組2年目の今年度、嶺南教育事務所へ異動となり、昨年度までの実践の継続は不可能となった。

教育行政の環境や業務内容は、今まで勤務してきた小・中学校の現場とは全く異なっていた。全てが戸惑いの連続であった。業務の内容を理解しこなすことが精一杯で、学校改革に向けた取組に何から手を付ければ良いか見当もつかなかった。現在も何が正しいのか分からないが、迷いながら進めてきたこの半年間の中から、教育行政職の立場で行っている取組を2つ紹介したい。

① 若狭町教務主任研修会の企画

前任校の取組から、学校を動かすエンジンは各組織のリーダーである主任であり、主任同士の横の繋

がりを作ることで学校全体が良い方向に動くことを実感した。また各主任をまとめる教務主任の役割が大切であることも学んだ。学校改革を進める上で管理職の考えやリーダーシップは当然重要だが、実際に先生方に動いてもらうには、管理職との仲介になる教務主任の役割がとても大きい。そこで、今年度は学校を外から捉えられる教育行政職の立場を利用し、私が担当する若狭町において、教務主任同士が学び合う機会を作れないかと考えた。主任会における学びが学校に良い影響を与えたように、教務主任会での学びが、町の教育全体に良い影響を与えることを願った。

研修会の企画については、若狭町の教務主任会の担当である校長先生に相談に伺った。学校現場ではちょうど新学習指導要領の基での教育課程が始まっている。教育課程を組む際を中心となる教務主任が新学習指導要領の求める2030年の社会をイメージし、それを理解した上でカリキュラム・マネジメントを進められるようにすることは重要である。そのためにも研修会の開催が必要である。業務削減の中で新たに研修の場が増えることになるが、校長先生はとて前向きに提案を受けてくださった。また校長先生ご自身がこの教職大学院の卒業生ということもあり、研修会の講師は、当時担当教員をされていた淵本先生をお願いすることになった。

その後、講師の淵本先生や若狭町内各小・中学校の教務の先生方と日程調整を行い、9月30日に教務主任研修会を開催した。当日は淵本先生から、世界の最新の教育から現在行われている探究的なふるさと教育まで、その繋がりについて説明していただき、その後グループ毎に教育について捉え直しの話し合い

がもたれた。また研修会には学年主任の参加もあった。参加者の先生方の熱量もあり、最初の研修会としては良かった。しかし、課題はいかにこの学びの機会を継続していくか、そのための目的と制度設計にあると考えている。先生方が主体的に学ぶ場となるよう、来年からの取組について、この後校長先生と相談することになっている。

② 「嶺南ふるさと学習」推進プロジェクト

嶺南は豊かな自然や歴史、文化に囲まれ地域や保護者からの協力や支援も厚い。恵まれた環境の中で小学校、中学校、高等学校とも地域に根ざしたふるさと教育を盛んに行っている。しかし、取組を学校間で連携させている事例は少ない。ふるさと教育を中心に学校間の縦横の連携を深めること、探究的なふるさと教育を通して身に付く非認知の資質・能力を明

らかにし地域で系統的に育てていくこと、ひいては子どもの主体性が発揮できる「嶺南だからこそ実現可能な」学校づくりを進めることを目指し、嶺南教育事務所では今年度より「嶺南ふるさと学習」プロジェクトを進めている。このような取組ができるのも、学校全体を外から俯瞰してみられる教育行政職の利点である。

教育行政職の立場からは直接先生方や子供たちに関わることは少ないが、広く地域の学校と関われる良さがある。ここに学校改革マネジメントの学びを生かしていきたい。まだまだ日々の業務に戸惑う毎日であるが、悩みや疑問を教職大学院で学ぶ仲間や先生方に尋ねながら、自分自身のマネジメントが生かせる部分を広げていきたい。

眠育授業実践について

～「寝る子は育つ」に向けたマネジメント～

学校改革マネジメントコース1年／あわら市芦原小学校 五之治 多美

教職大学院に入り、早半年が過ぎた。思い返してみると、色々な先生方や実践と出会えたことは大きい。おかげで、自分の視野が少しずつ広がってきた。そして、一番は「省察」の機会を得たことである。恥ずかしながら、私は、教職大学院に入って初めて「反省」という視点だけでなく、「省察」の視点でこれまでの自分を振り返り、文章に書きつづる経験をした。そして、意識の変化として、これまでは、何をするかを重視し、それがゴールになっていたが、今は「何を実践するか」だけでなく、「どうやってするか」「その方法でどうだったか」「これからどうするか」を吟味するようになった。「実践」が目的ではなく過程と思えるようになった。

今回のニュースレターでは、現在、養護教諭等と取り組んでいる「眠育授業」の実践を紹介する。

11月に、4～6年の学年でそれぞれ1回ずつゲストティーチャーを招いて眠育授業実践を行う。学校のスクールプランで「早寝早起きしっかり朝ごはん」に取り組み3年が経っている。これまでは「食育」が中心だったが、本校に数名いる不登校児童の背景は、夜型生活や朝が起きられないという実態もあることから、今年は「眠育」に力を入れることになった。前期の児童保健委員会の取り組みでも、児童全員に睡眠時間の調査を行った。予想通り、高学年ほど、ゲームや動画視聴の時間が長くなり、寝る時間は遅いという結果だった。

眠育授業の持ち方については、6月頃から教職大学院の血原先生に相談し、参考になる実践を紹介してもらった。その中で、「自分の体験を振り返る」「自分の思いや考えを伝え合う」学習活動が含まれた福井大学教育地域科学部附属小学校の養護教諭、齊藤先生の実践を参考にさせてもらった。授業の流

れを養護教諭と相談し、ゲストティーチャーには本校のSC（スクールカウンセラー）をお願いすることにしました。SCにだれに焦点をあてるとよいかを迷う思いを伝えると、「眠育の授業で、一人の児童が行動を調整できたらそれでいい」と。それを聞き、一度で達成するというより、まず始め、コツコツ行くことが大切だと感じた。

今回の眠育授業実践後、私は二つの点で吟味をしたいと思っている。①授業実践としてのマネジメントと、②今後の眠育推進にむけてのマネジメントである。

① 授業実践としてのマネジメントについて

授業は、担任と養護教諭だけでなく、SC等と連携する協働の授業である。「協働の授業のマネジメントがどうであったか」「子どもは自分事で、眠りや自分の生活を考えようとしていたか」を授業参観予定の教職大学院のスタッフの先生やストレート院生の力も借りて授業の振り返りを行い、次の学年での眠育授業実践に生かしたい。そして11月末、3回の眠育授業実践終了後には、「協働した授業作り」という面で振り返り、今後の眠育以外の「協働した授業作り」につなげたい。

② 今後の眠育推進にむけて

子どもたちの眠りや生活の習慣は、家庭で何年もの間、積み重ねられてきたものである。そのため、SC

の言葉でもあったように、眠育の授業1, 2回で、子どもの眠りの実態を変化させることは難しい。だから、眠育推進は、次年度からも、やり方は検討したとしても継続させていきたい。また、校内での眠育推進だけでなく、就学前の幼児期からでも眠育推進の必要性があると感じている。それは、就学相談の際、私は、子ども園の保護者の話を個別で聞く機会をもった時に、夜11時過ぎてからやっと寝る幼児の話を目にしたからだ。園児ですでに「眠育」が阻止されている状態である。また、保護者の相談内容が「子どもがテレビでYouTubeを見続け、やめさせられず困る」と。子どもの夜型生活やゲーム、動画による眠りの阻害は、ますます増えるという危機感を感じた。今後、就学相談を機会に、園の先生方と子どもたちの眠りや生活の習慣に関して話を聞こうと思う。そして、子ども園と小学校で連携するということを確認したい。

眠育推進は、スクールプランや学校の目標でなかったとしても、子どもが育つ基盤として、とても重要だと思う。夜型生活に子どもが行きやすい時代背景の他、保護者の事情に左右される子どもも多い。子どもたちの基盤を支えるため「寝る子は育つ」「夜は、休む」を再認識する場を授業などから設け、できることから始めたいと思う。

自身の変容とミドルリーダーとしての自覚

ミドルリーダー養成コース2年／福井大学教育学部附属幼稚園 岡山 佳耶

私は毎回、このニュースレターを読むのを楽しみにしています。それは、直接のやり取りでは味わえない良さがあり、その良さが私の性分に合っている気がするからです。具体的には、ニュースレターは私の苦手な「聞くこと」「話すこと」が何度もできるという良さがあると言えます。日頃のカンファレンスでは、「え？それってどういうこと？」と話を

捉え切れなかったり、「ああ～上手く話せなかった」と思いを伝えられなかったり、どこか不完全燃焼なまま終わってしまうことがあります。しかし、ニュースレターは何度も読み返すことができ、そこに記されている状況や言葉に、自身の思いや考えを思う存分ぶつけることができます。これは満足いくまで「聞ける」「話せる」ということだと思いま

す。結局、自分の頭の中のやり取りになってしまうので、到底、対話しているとは言えませんが、ニュースレターは、私なりに先生方の思いや考えに耳を傾け、思いを寄せる時間を与えてくれる貴重な存在なのです。

さて、今回はそんなニュースレターの書き手として、担当が回ってきました。書き出しに悩んでいると、昨年度も同じような時期に担当が回ってきたことを思い出しました。「1年前の私はどんなことを考えていたのだろうか？」ふと、そのような気持ちになり、昨年度の文章を読み返すところから始めました。1年前のニュースレターには、業種や職場が変わり、さらにコロナ禍という状況に戸惑っている様子と、そこに向き合うための問いや学びを教職大学院で見つけ、救われているのだという感謝に近い思いが記されていました。そして、最後は、自分のことで精一杯だった半年間を反省し、今後はミドルリーダーらしく、周囲に目を向けていくことを誓って締めくくられていました。

「これが1年前なのか」と疑うほど、もっと昔の文章を読んでいるような気持ちになりました。なぜなら、私はこの1年間に何度も「問い、学ぶ」ということを繰り返し、自分に大きな変容があったと感じているからです。変容前の自分を思い出すことは、例え1年前であっても、遠い昔に感じてしまいます。中でも昨年度の締めくくりの言葉にある「ミドルリーダーらしく」という部分に対して、大きな変容があったように思います。昨年度のこの時期は、自分の実践力を高めることしか考えておらず、「子どもとどう向き合うか」「保育をどのように展開するか」ということばかりに目が向いていま

た。しかし、教職大学院での様々な先生方との出会いを通して、子どもや保育の中身ばかりに向けられていたフォーカスが、大人（保育者）にも向けられる瞬間が増えていきました。そして、「子どもも大人（保育者）も同じだ」と感じる部分を見つけることに繋がりました。この捉えが、私に変容する大きなきっかけだったように思います。私は「子どもの個性」や「その子らしさ」というのを大切にしたい保育を目指しているのですが、実は、それは保育者の世界でも同じなのではないかと考えるようになりました。保育者も「個性」や「その人らしさ」を大切にして保育することが重要なのではないかと思うようになったのです。そして、ミドルリーダーというのは、「個性」や「その人らしさ」を大切にできる保育者集団の一員として、自らの実践でその環境を支える存在なのだとの私は考えています。また、自分にはミドルリーダーとして、そのような存在になることが求められているのだと、ようやく自覚するようになりました。今の自分は自覚することが精一杯で、実践することはできていません。しかし、自分の中でミドルリーダーの存在に迫り、自分なりに役割を見出したことや、わずかなミドルリーダーとしての自覚が芽生えたことは何よりの成長であり、変容だったと思っています。

そこで、今回のニュースレターでは、問い、学ぶ中でたどり着いた「私が考えるミドルリーダーの役割」を少しでも果たせるような実践をすることを誓って締めくくりたいと思います。ここからさらに1年後、ミドルリーダーとして、一人の実践者として、前向きな変容を遂げた自分になっていることを願っています。

教える教師から、生徒を支える教師への変容

ミドルリーダー養成コース2年／新潟県燕市立分水中学校 牛腸 つぐ実

先日オンラインで参加した、新潟県の中学校の研究発表会テーマが「世界を変える力をもった生徒を

育む教育課程研究～エージェンシーを育む視点からの教育課程編成～」であった。その発表会の全体説明

の中で、「Teaching (教える) から Learning Support (支える)」と言うキーワードがあった。その言葉は、まさに私が教職大学院で学びを深める中で、たどり着いた言葉であった。「Teaching から Learning Support」については、今更ですか？と言われそうだが、私にとっては、ようやくたどり着いた言葉であった。

長い教師生活を経た私にとって、従来の授業スタイルを変えるのは容易ではなかった。今までの私は、自分が知りえた知識を生徒にどのように伝えていけばよいかを考える毎日であった。「主体的・対話的で深い学び」は、単元や授業の中の一部として捉え、自分ありきの教師であった。子どもたちに多くのことを学んでもらいたいと思い、そのために事前研究を行い、子どもたちにより多くの知識を知ってもらい、その学力が定着することにやりがいを感じていた。だが、ごく最近になって生徒たちが生き生きと活動しているか、疑問に感じるが増えた。私は間違っていたのではないかと、ならば、どうすればよいのか？と考えることが増えた。そんな折に、福井大学の教職大学院と出会った。この出会いによって、私の悩みが解決するかに思えたが、むしろその逆であった。学べば学ぶほど自分の無知が露呈され、考えれば考える程、負のスパイラルにはまって行く。私はどうすればよいのだろうか。元々少し、あまのじゃくなどころがあり、「このようにしよう。」と文科省から打ち出されても「なぜ？」と考えてから行動することがあった。自分の中で良くかみ砕き、消化できないと納得できないことがあったように思う。

それはミドルリーダーとして長所として現れることもあったが、面倒な教職員であったかもしれない。若い頃はそれで押し切れる部分もあった。また自分の立ち位置に気付かず、傍若無人な振る舞いを平気でおこなってきた。だが、今の私はミドルリーダーとして中間管理職のような立場である。管理職の苦悩も理解でき、若手教職員の気持ちも分かる。どっちつかずの立ち位置に、周囲も自分自身も不信感を抱いてしまう。私がリーダーになって担当する小さなコミュニティが上手く回っていないように感じ始めた。

それは授業も同じである。頑張っているはずなのに、歯車がかみ合っていない心地の悪い状態に陥ってしまった。そんな中で私の道標になったのは大学院の学びであった。入学をきっかけに多くの院生と出会い、たくさんの人と繋がった。そのつながりを生かし、我が分水中学校の生徒と、院生の学校の児童・生徒さんとオンラインで繋がることができた。繋がることは授業の目的ではないが、一つの魅力的な手段として、生徒や教職員に良い刺激となった。生徒がワクワクした様子で自主的に学びを深める様子は、かけがいのない瞬間であった。また、院生同士の語りの中で、自分が悩んでいた本質が見えた気がした。そして院生になってからは、今まであまり読まなかった専門書を手にとることが増え、その中から今の自分の現状を解決する糸口を見つけられたこともあった。Conference や RoundTable では、お互いの協働・探究を語り合い、今後に生かせるヒントを見つけられたこともあった。もう一度原点に戻り、自分がやるべきことを探って行けば、おのずと道は開けるのではないかと思っている。特に大学院の授業の中で、先生方や院生から学ぶことは多い。毎回の授業で、目からうろこがこぼれ落ちるようである。私たち教職員が学ぶのは、「すべては子どもたちのためである」。私が現状に行き詰り、困った顔をしていると、福島先生が救世主のようなこの言葉を投げかけてくださる。子どもたちがエージェンシーを育むために、私がたどり着いたものは「教える教師から、支える教師への変容」である。子どもたちのコンピテンシーを支え、今こそ本気で取り組まなければならないと思っている。この先もまだ悩みは尽きないが、教師としての楽しさを見出し始めている。今更？と言われそうであるが、楽しさを忘れずに学びを止めないことこそ、子どもたちに寄り添える初めの一歩なのではないだろうか。M2の授業も残り半年を過ぎたが、教職大学院の皆様にはこれからも多くのことを学ばせていただきたいと願っている。そして、その学びを在任校に還元して行きたいと思っている。

みんなが、笑顔で安心して過ごせる学校づくりをめざして

ミドルリーダー養成コース1年/坂井市立高椋小学校 石川 裕子

昨年度、特別支援教育センターの「特別支援教育コーディネーター専門研修」を受講して、ご紹介いただいた教職大学院に入学させていただきました。月日が過ぎるのは本当に早く、自分が取り組みたいと思っていたことが思うように進まないこともあり、思っていなかったことが進んでいることもあり、とても濃い日々を過ごさせていただいています。

私は、管理型（一斉に子どもたちを動かしていく）でこれまで普通学級を担任してきました。数年前にたくさんの支援が必要な子どもたちに出会い、自分のこれまでの指導方法では進めることができないことを痛感しました。「普通学級にいる特別な支援を必要とする子どもたち」の存在を強く感じたのです。

それまで、「特別支援教育」とは心身に障がいをもつ子どもに対しての教育だと思っていました。私には関わりのないどこか違う場所で行われていると思っていました。しかし、現在「発達障害」と呼ばれる外見ではわからない子どもたちへの支援が必要になっています。これまでは、「叱る」こと、強制的に参加させることで集団での一斉学習をすることができていた（と思っていた）のですが、集団から離れ、集団の中で騒ぎ、暴れるなどの問題を起こしています。

昨年度は、「ユニバーサルデザインを取り入れた授業研究」を学び、教師主導ではなく、子ども目線で支援していくことの大切さを学びました。「抽出児への手立てを考えた授業」では、気がかりな子どもの様子を1時間観察することで、これまでの自分の「当たり前」がいかに身勝手なものだったかを感じました。また、「アンガーマネジメント」を学ぶことで、思いを伝えていくことの難しさや伝える上でのポイントを知りました。「愛着障害」を知ることで、子どもに合った寄り添い方を学びました。

今年度は、教育相談担当として学校全体の気がかりな子どもたちへの支援についても学ばせていただいています。昨年度問題行動の多かった子を今年度担任して、どのように支援していけばよいのかを模索しています。まず、「観察日記」をつけることにしました。4月当初は椅子に座らず、学習にも参加せず（でも、教室から出て行くことはありませんでした。）床に背中をつけてくるくと回り、教室の隅でじっと動かないこともありました。何がそうさせるのか、自分がどのような声かけをしたのか、行動を起こす前に何があったのかを探りました。

私は、特別支援を学ばせていただきたいと思い、「2系特別支援コース」を履修をしています。そのため、「特別支援教育ゼミ」で「心理学的行動図」を学ばせていただいています。参加している若い院生の先生の方がとても理解されていて、恥ずかしい限りなのですが、「子どもの行動には理由がある」との言葉には、本当にこれまでの自分を反省してばかりです。

前述の気がかりな子どもには、次のように支援していくことを心がけました。①本当に危険なことだけを叱る。②叱るときには、どのような行動が危険だったのかを伝え、くどくどと言わない。③学習の準備ができていないときには、声をかける。ときには一緒に準備をする。進まないときには無理強いをしない。④宿題は、提出したときには見て、直しはできるだけ少なくする。もちろん、提出したことをほめる。⑤困ったときには助けることを伝える。（言えなくて問題行動を起こすことが多い。）準備できないもの、忘れたものは可能な限り貸し出す。⑥保護者には、連絡帳でよいことをほめ、どうしても準備してほしいものなどを伝える。⑦できたこと、努力したことは、大きめに伝えてほめる。

年度初めよりも、周りのことを考えられる、学習にも以前よりも参加できることがとても増えてきています。これも、校内で関わってくださっている先生方や、SSW（スクールソーシャルワーカー）、月間カンファレンスで私の話を受けとめてくださる先生方のおかげです。

夏休みには13日間、夏期集中講座と特別支援教育ゼミに对面で参加させていただきました。やはり、オンラインではなく、对面で「対話」をすることの大切さを強く感じています。ゴールとはとても言えませんが、もうしばらく、この特別な空間で大切な子どもたちへの支援の方法を探していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

「対話」が生まれる組織・集団づくり

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校 河野 茅乃

教職大学院に入学して、はやくも半年の月日が流れようとしている。入学前から教職大学院は「理論」と「実践」を往還しながら学びを深めるところだ」ということは聞いていたが、それを身にしみて感じている。長期間に渡る学校現場でのインターンシップは自分にとって毎回とても楽しく、刺激的で、インターン校の先生方、そしてなにより児童たちからたくさんの学びを得ている。本稿は、そんな学校現場の様子、また、私たち授業研究・教職専門性開発コースの院生が金曜日に行っている週間カンファレンスでの様子から「対話」に焦点をあて、述べていきたいと思う。

4月から中藤小学校に配属となり、5年生の学年に入り学校生活を送っている。今もそうだが、4月当初よりメンターの先生の学級経営からたくさんのことを学ばせていただいている。小学校では授業と学級経営の両輪がうまく回らないといけない。特に、「対話の素地」に関しては、授業だけや学級経営だけで完結するものではなく、この2つが折り重なって育成していくものであると痛感した。自身が興味を抱いている対話型授業や協働探究型学習を行うための

手立てはいくつも開発されているが、この授業はそもそも、話し合える雰囲気があれば実践が難しい。インターンシップでは、朝の会のスピーチ、学級会、授業中など、対話の素地をつくる場面は学校生活の中にもいくつもあることを学んだ。さらに、対話に関して自身の考えが大きく変わったことが1つある。対話というと、どうしても話さなければいけない雰囲気になる。しかし、対話には、発言はせず「聴く」という参加の仕方もあるということだ。しかし、聴くという参加をした子は、聴いたからにはそれに対する応答責任がある。それが「話す」に繋がるということだった。そして、教師は児童同士の意見をつなぐファシリテーターとして対話に参加するのである。まずは聴き合い認め合えるような学級作りを意識していきたいと思った。

以下、週間カンファレンスの話に移る。このカンファレンスでは様々な議題に関して、学年、教科、校種、そして居住している県が違う院生同士で話し合いを進めているが、この時間が教職大学院での最大の強みであると感じている。それも、私自身、授業研究・教職専門性開発コースの中でも授業研究専門性開発

アプローチに所属しているため、授業に関して研究していききたいこと、それに基づく授業参観の視点は持っている。しかし、この研究はどうしても自身の教科である社会科の特質に特化した研究となり視点が偏ってしまう。考え方や学びたいことが違う院生が1つのグループになり、課題について対話を重ね、結論を導いていく過程では新たな視点が生まれる。この過程を今後も大切にしていきたい。

最後に冒頭の理論の話に戻るが、前期の週間カンファレンスでは、カントから OECD の資料まで幅広い理論を学び、学部時代には重視してこなかった理論の重要性に気づけた。メンターの先生も「実践のベースには、理論がある」とおっしゃっていたように、教員になってからも理論は自分の教師観、授業観を語る上では必要になってくることだと思う。今後も、新たな理論を学び、理論と実践を往還しながら学んでいきたい。

「自分ならどうするか」

授業研究・教職専門性開発コース 1年/岐阜聖徳学園大学附属中学校 前田 光哉

大学院に進学してからあっという間に半年が経ち、今年も残すところ2ヶ月となった。週3日のインターンシップ、岐阜拠点での木曜カンファレンス、福井との金曜日カンファレンスなど、どの場においても貴重な体験をさせて頂いている。

前期は、4月に立てた「意味を考える」というテーマを元に学びを進めてきた。例えば、インターンシップでの朝の挨拶。7時30分から昇降口で校長先生、教頭先生と一緒に生徒を出迎える。今までの自分は「挨拶」はただ単に相手の目を見て、元気よくするものであり、礼儀の一つだという程度の認識であった。私自身、早起きは気を張らないとできないため、正直面倒だと思っている自分もいた。しかし、校長先生から朝の挨拶を毎日続けることの意味を教えていただいて実践していくうちに、面倒だとは思わなくなった(早起きは相変わらず不得手だが)。挨拶を毎日していると、生徒の「小さな変化」がよく見えるのである。例えば、昨日に比べて生徒が元気であったり、逆に顔が暗かったりという表情の変化や、人間関係の変化が特によく見える。また、通学方法についても、自転車やバス通学の生徒が保護者に送ってもらうことが多いことに気付けば、その生徒の家庭の状況や変化についても察しが付くこともある。さらに、送り迎えをしている保護者の方と目が合えば会釈ができ

るため、保護者とのよい関係づくりのきっかけにもなる。

挨拶一つであるが、本当にたくさんの意味があることを学んだ。その他にも、掃除や集会行事やその配置など学校生活に存在するものには必ず意図や意味がある。後期も物事の理由や意味を考える習慣は続けていきたい。

ただ、後期に入って1単元分の授業実践をやらせて頂いたり、カンファレンスで語り合ったりする中で、「意味を考える」ことで納得するだけでは何も変わらないことに気付いた。納得した意味を踏まえて「自分ならどうするのか」について考え、「実行」に移していかないと何も始まらないのである。前期は授業についてメンターの先生から、「自分が受けて面白いと思えない授業であれば生徒が積極的になれるわけがない」ということを学んだ。前期は気付いただけで終わってしまっていたが、後期はどうするのか。今は11月頃の「凸レンズのはたらき」の授業実践に向けて準備を進めているが、生徒が魅力を感じられる学びをデザインするため、まずは自分が凸レンズを使って遊んでみることにした。すると頭で考えているときよりも実に様々な発見があった。これ以上は長くなってしまったため、続きはまた後日、実践をまとめて報告しようと思う。

カンファレンスについてはコロナが少し落ち着き、10月に初めて福井に出向くことができた。オンラインより対面での語り合いの方が好きである。また、直接話す方が意思疎通しやすく、福井と岐阜の間での情報共有も円滑に進み始めた。なんとといっても今まで会えなかった方々に会えたことが一番の収穫である。岐阜拠点のカンファレンスでも後期から教授に頼り過ぎず、ストレートマスター4人が中心となって運営する形が取れるようになった。個人の学びと同時に組織としての学びも進めることができる、こんな贅沢な状況はない。恵まれた環境に感謝しつつ、今後の活動に励む。

以上のように、この半年間で「意味を考える」というテーマからそれを踏まえて「自分ならどうするのか」というテーマに移り変わった。自身の学び、組織としての学びは着々と進んでいるように感じる。また、生徒も毎日たくさんの学びを生み出し半年でも確実に成長していると感じる。子どもの学びは大人の学びの相似形と言われるからには学びを止めている暇はない。そのなかでも楽しむことは忘れず、まずは残りの1年半、教育に没頭しようと思う。

理想と現実をどのように結びつけていくか

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校 立石 虎太郎

大学院での学びが始まり、早くも半年以上が過ぎた。工学部からこの教職大学院に入学した私にとって、この半年は、様々な学びや気付きの連続だった。今回はそんな半年間の中から、「学校」「生徒」「授業」の3つの観点から学んだことや考えたことを記していきたいと思う。

まずは「学校」についてである。私は高校理科教員を目指していることから、現在、インターン先として丸岡高等学校の方にお世話になっている。学部時代に経験した教育実習以来の学校現場での研修のため、当初は不安もあったが丸岡高等学校の先生方が温かく受け入れてくださるおかげで、現在に至るまで、非常に有意義なインターンを行うことができている。丸岡高等学校でのインターンでは私たち院生を一人の先生として扱っていただけるため、授業はもちろん、クラス業務や校内分掌、生徒の進路対応など様々な業務を経験させていただいている。教育実習では学べない教員としての仕事はもちろん、先生方との会話の中で得られる様々な教育に関する体験知は自分自身の大きな財産となっている。

次に「生徒」についてである。このインターンシップの大きな成果として長期にわたり生徒と関わることで、教育実習では見えなかった生徒の本質を垣間見ることが出来た。まだ半年間という短い期間ではあるが連続して生徒の学びを観察・記録していくことで、生徒たちの様々な成長に気づくことができた。また私たちインターン生という存在に、当初は生徒も戸惑っている様子だったが、授業や学校行事などで関わる中で、次第に心を開いてくれ、現在では様々な相談を受けるようになった。このような長期にわたる生徒の成長や関わりの変容についての経験は自分自身に教員としての喜びを再度認識させてくれたように思う。

最後は「授業」についてである。丸岡高等学校ではインターン当初から多くの授業実践をさせて頂き、合計で40回ほど授業実践をさせて頂いた。この経験を通し、半年間で①大学院での学びを実践する。②その結果を大学で省察する。③省察を踏まえ再度、実践を行う。といったサイクルを数多く行うことができた。この経験から、効率的な授業準備の方法、生徒を引き付ける授業の方法、授業における生徒との関係

の重要性などについて学ぶことができた。今後このサイクルを持続し、さらに授業についての学びを深め、今後の授業開発に活用していきたい。



合同カンファレンス・ラウンドテーブル報告

言葉にできつつある対面学習の重要性

学校改革マネジメントコース2年/東京大学教育学部附属中等教育学校 対比地 覚

10月の合同カンファレンスは、「掴みきれずにいた感覚や考えがどんどん言葉となって表れてくる。この“場”をもっと意図的に生み出したい。」そんな思いに包まれる4時間でした。

午前のグループセッションは全体の間でも発表されたカリタス幼稚園の西川くるみ先生への質問で始まりました。「自分の意見を言えるなんて思っていなかったし、そのようなことを期待されているという感覚もなかった。」とおっしゃられたことをグループのみなさんと深掘りしていく内に、私たちに不足しているのは「聞く」スキルであり文化ではないかと思に至りました。とかく子供や保護者などに

「話す」ことが仕事のメインとなる教員は、“何を言うべきか” “どう言ったら効果的か”と頭を使い、上手に話すことを求められる毎日を送っています。そして、聞いてもらって当たり前環境に慣れています。その一方で、基本的に自分が立てた学びのプランに沿って物事を進めるのが日常の私たちにとって、自分の視点や考え、筋書を保留して相手の意見にどっぷり浸かる傾聴の機会はそれほど多くありません。また、昨今はYouTubeやInstagramをはじめ“発信する”ことに価値が置かれ、教育現場でも“発表”や“プレゼンテーション”の機会が増えました。「説明責任」という言葉もよく聞きま

すが、いずれも「言う側」「話す側」にどんどん重心が傾いていっているように感じます。つまり、議論や対話において常に私たちの関心は「言う」ことにあり、「聞く」こと（の責任）が疎かになりがちなのではないかと思うのです。だから、職員会議や職場内で“言えている実感”がなく、それによって「言っても仕方がない」というあきらめの気持ちや「トップダウンで決められてしまう」という不満が募っていくのではないかと考えました。それは、西川先生の「“言える相手”がいたことで、少しずつ全体の間でも発言できるようになっていった」というお話にも通じることだと思います。

午後のセッションで最も印象に残ったのは、「対面の場合、相槌や視線などで同じ時間を共有することができ、それが話し合いを豊かにする」という^{くだり}件です。一体感によって話しやすい空気がつくれるからだけでなく、その同時性が新たな考えや当初の予定にはなかった話まで場に引き出す作用をもっているからという話です。このことを議論している正にその時、私は聞き手の存在を感じることで自分の思考がよりクリアになり、傾聴に促されるまま言葉が生み出されていくのを感じていました。つまり「聞くことに集中する」という積極的な参加によって、聞き手は逆説的に話し手と共に“話をつくつ

ている”ことを理解しました。そして、このときの“積極的”が対面学習の意義の一つであり、その訳語に当たるのがアクティブラーニングのアクティブであると感じた次第です。一方、順番が必ず生じるメール（テキストによるやり取り）や音の重なりが阻害要因となるオンラインミーティングではこの同時性が許されないため、あらかじめ話し手の頭の中にあることしかアウトプットされず、対話による新たなアイデアの生成＝学びが起こりにくくなるのかも知れません。これは、私が昨年度から感じているオンライン学習の煮え切らなさをうまく説明してくれます。もちろん一人でじっくり考える時間も必要であり、考える際の道具が「言葉」であることも否

定しませんが、一緒にいなければ共有できない非言語的感覚や生み出されないアイデアがあり、多くの場合、そうした言葉にならない感覚やアイデアが豊かな学びのタネであり原動力になるというのが実感です。

そう考えると、これからの教育の推進力となる「主体的・対話的で深い学び」と「GIGA スクール構想」の両輪を上手に走らせるのは一筋縄ではいかず、両者の関係性をよくよく吟味しないと脱線してしまうことも再認識できたカンファレンスとなりました。

尊重し合って対話を重ね、協働していく

学校改革マネジメントコース1年/敦賀市立角鹿小学校 茅田 昌代

「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」—10月の月間カンファレンスのテーマは、今の私にぴったりだった。そして、実践発表してくださった吉田清子教頭先生（国見中）の「尊重し合って対話を重ね、協働していく」という言葉は、私が教職大学院で研究していくテーマの根幹である。

私が勤務する角鹿小は、福井県で初めての施設一体型小中一貫校として今年度スタートした学校である。4月に赴任した教職員は皆“新しい”同僚であり、角鹿中の教職員と共に世代を超えて学び合う学校生活が始まったのである。3月まで単学級だった学年は全て2学級編成となり、学年主任は新たな同僚との学年経営を行うこととなった。どの学年も学年主任の新たな同僚は若手教員で、ペアで世代を超えて学び合うこととなった。そして、9年間の子どもの学びを共に支える同僚として、中学校の文化を理解し、尊重することは、対話につながる第1歩である。

また、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」ことは、子どもたちにとっては「新しい友達と支え合い、学年を超えて学び合う」と言い換えることができる。私は、授業の中で子どもたちが交流することを通

して、小学校と中学校の教員が協働することを推進したいと考えている。ようやく新型コロナウイルスの感染状況が収まってきて、小学校と中学校の交流ができるようになった。そこで、次の2つの「中学生サポートプロジェクト」の取組を行った。1つ目は、小5の算数「小数のわり算の筆算」の技能を高める学習に、中1がサポートに入るという取組である。中1は、小5が解く問題を事前に学習した上で臨んだ。問題を1問解くごとに中1の「正解！」という声が聞こえる。この言葉は、小5にとって次の問題を解くエネルギーになる。数字を書く手が止まると、中1は自分の解答用紙に目を通して「ひき算、もう一回してみようか。」と適切な助言をする。ひき算に戻って計算をし直し、正解にたどり着いた小5は「ひき算を間違えていたのか。」と、自分のつまずきに気付く。小5は、中学生が見守ってくれていることを心強く感じ、安心して問題に挑むことができた。中1にとって、小5へのサポートは自己有用感を高めることにつながった。

2つ目は、小1と中3の家庭科における交流である。コロナ禍で保育園や幼稚園に保育実習に行けな

い中3が、学校で一番園児に近い小1と交流することになった。小1は「これ、どうやって遊ぶの。」と中3に聞く。中3は、膝を折り小1の目線に降りて説明する。中3は交流を通して発達の状況に合った関わりを学び、小1は豊かなコミュニケーションを図りながら、仲良く遊びを楽しむことができた。この2つの取組は小学生と中学生どちらにとってもWinWinの成果を上げることができた。この授業づくりの過程で教員同士の対話の場が生まれ、児童生徒の姿を通して教員同士がお互いを理解する。「中学生サポートプロジェクト」は、小学校と中学校の教員の協働体制を推進することにつながるという手応えを感じている。

教職大学院での学びを始めた4月には、「さあ、全員で進みましょう！」と大旗を振り、小学校教員と中学校教員が全員で行う取組を進めていこうとしていた。しかし、右往左往するばかりでうまくいかなかった。合同カンファレンスで、小さなコミュニティから始めるという視点をいただき、学年や学団の先生に

声をかけることを始めた。そして、今は授業づくりを柱に子どもたち同士の交流を通して教員同士の協働を図る取組を実践している。今後は「小・中の協働を生むカリキュラムづくり」を推進していきたいと考えている。

悩んだときに悩みを受け止めてくれる仲間がいる。不思議なことにグループの仲間には何かのつながりがあり、対話の中で解決の糸口が見つかる。そして学校現場で実践し省察する。この教職大学院のサイクルに心地よさを感じている。今回の10月のカンファレンスもまた、実践発表をしてくださった吉田清子教頭先生をはじめ、10名の先生と対話することができた。ファシリテーターの先生からは「今がよし、とするのではなく、創っていくことが大切である。」という励ましの言葉をいただいた。この言葉もまた、角鹿小に勤務している私にとってぴったりだ。

角鹿小中学校が「尊重し合い、対話を重ね、協働していく」学校となるよう、明日もまたがんばろう！

新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う

～10月の合同カンファレンスを振り返って～

ミドルリーダー養成コース2年/福井県立足羽高等学校 前田 美知恵

10月のカンファレンスでのキーワードは、「対話」だ。私が勤務する足羽高校は進路多様校で、いわゆる教育困難校である。「生徒が、自ら考え、自ら課題を設定し解決する力、『主体性』を育むためには、どのような指導をすればいいのか？」また、「ミドルリーダーという立場から、ベテランの先生や若手の先生とどのように同僚性を育んでいけばいいのか？」を日々考えている。

本年度も、昨年に引き続き、教育相談を担当している。現在2学期に入り、悩みを抱え相談室に来る生徒も増えてきた。生徒の悩みを聞いていると、生徒との面談を丁寧にいき、普段の学校生活のなかで担任の先生とクラスの生徒一人ひとりがしっかり「対話」

を重ねているクラスの生徒は、クラスについての愚痴や不満はできるだけ言わない傾向があることに気づいた。担任の先生が「自分のことを理解してくれている」という安心感が、クラスの居心地を良くするのかもしれないと感じている。私自身も担任をしていた時、他の仕事で忙しく、生徒の様子をよく見ていなかったり、生徒との対話が疎かになっていたりしたときは、朝クラスに行くと、何人かの生徒が元気のない顔をしていたり、ぼそっと不満をもらしたりすることがあったと思う。担任は忙しく面談をする時間も限られているが、自分の経験より、朝のSH（ショートホーム）でこちらから声をかけたり、休み時間に声かけをしたりするだけでも効果があると思う。

担任の先生が、部活動や他の業務で忙しく、クラスの生徒との面談ができないときは、相談室で気になる生徒の面談をしたり、教科担当の先生から気になる生徒に声かけをしてもらったりと周りからのアプローチも可能である。カンファレンスの午後のクロスセッションの中で、「生徒と担任の先生の対話が大切だ」という私の意見に対し、西藤島小学校の鈴木先生が、「『先生と生徒の対話』も大切だが、『生徒同士の対話』も大切だ、教員が、生徒同士がお互いを思いやるようなヨコのつながりをつくる仕掛けをすることも必要ではないか？」とアドバイスをくださった。その時、特に教育が困難な高校では、対人関係づくりや、集団活動への参加に困難を抱えている生徒も多く、そういった点での支援が必要だと気付かされた。応研レポート No. 82 の中で、早稲田大学（心理学博士）河村茂雄教授が「大学受験は団体戦である。・・・支え合い、学び合い、高め合う、満足型のまとまった学級では、生徒たちの学習意欲と学習活動が高まり、進学実績がとて高まることが実感されてきた。」と語っている。そこで、本校でもQU（心理テスト）をもとに研修会を行い、本校スクールカウンセラーの協力を得て、学級が親和的な集団になるような「リレーション」活動を先生方に紹介をした。研修会を行ったところ、本校では、これまで毎年6月に1回のみQU（心理テスト）を行っていたが、本年度は、2学期にもQU（心理テスト）を行いたいとある担任の先生から要望があり、希望があったクラスのみ10月に2回目のQU（心理テスト）を実施することになった。

更に、学校における様々な場面での同僚間の「対話」の大切さにも改めて気づいた。カンファレンス

の最初に、国見中学校の吉田清子教頭先生が「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合うことの意味」と題して、授業改善を柱とした組織改革についてお話して下さった。吉田教頭先生は、「最初、国見中学校に赴任してきて、慣れない環境での組織改革だったが、教務主任と研究主任を巻き込みながら、対話を重ねることで状況を改善してきた。職員室でいろんな先生より生徒の様子について話を聴き、地域の声に耳を傾けてきた。」「小規模校だからと言い訳をせず、『SWOT分析（弱みと強み、内部環境・外部環境に分けて分析）』を教員全体で協働しながら行っている。」とおっしゃっていた。最後に「新しい同僚として、メンバーに加わり、経験豊富なものは、若手の言葉に耳を傾け、常に改善の余地を探り、若手は、経験豊富な方々の声を真摯に受け止めながらお互い尊重し合って、対話を重ね、協働していきたい。」とおっしゃっており、私が夏期集中講座で読んだ書籍『学習する組織』のなかでも、対話（ダイアログ）の大切さが書かれていたことを思い出した。同じ会社で、部署の違う社員同士がほとんど対話をせず、また他の部署の仕事の状況を全く把握せずに、それぞれの部署が独立して作業を進めていたために、全体として生産性が悪くなってしまった例が挙げられていた。組織として同僚性を育み、学校全体が一枚岩となりチームで生徒を育てるためにはまず同僚間の『対話』が不可欠であると再確認した。今後も勤務校で『対話』を重ね、教職大学院での自分の学びを他校の先生と『対話』をし、共有しながら自らの実践を省察していきたい。

草の根からの幼稚園改革を振り返る

ミドルリーダー養成コース2年/カリタス幼稚園 西川 くるみ

今回はオリエンテーションで、カリタス幼稚園がゆっくりと草の根から変わっていき、そのために風通しよく、ベテランも若手も学び合う組織となっていることについて報告する機会をいただきました。

私は現在復職して9年目、そのうち常勤嘱託から専任に変わって4年目ですが、雇用の転換によって蚊帳の外だった自分から主体性を持ち始めるまでの変容を振り返ることができました。私自身は、ゆっくり

じわじわと進んできた幼稚園改革が追い風になって、いつの間にか主体的に取り組むことができるようになっていきました。

幼稚園改革は、毎年具体的な色々なことに取り組む中で、一人ひとりが意見を出しやすくなっていったわけですが、幼稚園が変わったきっかけのひとつは、大学院での学びです。2016年度から私たちの幼稚園ではこちらの大学院での学びが始まり、私は3人目です。こちらでの学びが続くことで、3人のコアメンバーにそれぞれの周辺メンバーが協働するという形で幼稚園全体が実に静かに、草の根から変わっていったというわけです。改革は一人ひとりのマインドを変え、トップダウンによる伝達がメインの職員会議だったところから、今では全員参加の職員会議になりました。また、現在の私たちの職員室ではみんながアイドリング状態であり、決め事に対するスピードと共通理解度が格段に上がりました。

毎年、何かしら良くなろうと模索してきたのですが、やはり子どもと取り組む具体的なことで知恵を出し合う場面が、それぞれが一番主体性を発揮できました。年ごとの変革のテーマは以下の通りです。

2014年度 環境を整える

2015年度 初めての「公開保育研究会」

2016年度 時程の見直し（この年から大学院での学びが始まる）

2017年度 横割りカリキュラムの見直し

2018年度 研究部発足 「紀要」を作成

2019年度 ウロウロタイム※開始

※公開保育研究会で、他クラスを見ることが学びになるとの声から、教員同士がもっと気軽にお互いの保育を見合おうという取り組み

2020年度 園内ラウンドテーブル

2021年度 新園舎建築中につき、様々な検討事項をみんなで考える

2016年度から大学院での学びが始まり、今思えばその頃から少しずつ、時短勤務の私でも主体的に関われることが増えてきて、2018年度に始めた紀要作成では、担任も副担任も、ベテランも若手も同じように自己を開示し、保育を振り返ることで主体性を求

められるようになりました。雇用形態、経験値、責任の度合いなどいろいろありますが、子どもにとってはみんな同じ“先生”なのです。私は自分自身の立場が変わったことで、コアメンバーの熱意も、周辺メンバーの心の持ちようもどちらも経験し、みんなが主体的に働くことができたらどんなに良いかと思います。一人ひとりが開かれたことで思っていることを言う相手ができたとし、パイプになって繋いでくれる役割もあります。聞いてくれる可能性があるから、安心して言うことができると思います。先生方が「幸せ度が増した」と表現しているのは自己マスターが実現している表れではないかと思います。

そんな開かれた関係の中でしたので、昨年度ベテラン・中堅・若手すべての世代が揃う年少の学年主任をしていた時も、学年担当6人みんなに主体的に関わってもらうことができました。大まかな計画や振り返りは座談会方式でざっくりばらんに、具体的な計画は「音楽・造形・運動」の3チーム2人ずつに分かれて調整するというやり方で、良いコミュニティができました。何でも言い合える座談会では、若手の率直な疑問からベテランも学びがあり、チーム年少として大事にしたいことも見えてきました。これまでに主体的な学びをしてきた若い世代は頼もしく、どんどんトライ&エラーをしながら頑張っているし、その姿から私たちベテランチームも謙虚に学び合うようになってきています。今年度は“仕事のできる”後輩に学年主任は引き継がれ、私はフォロアーになりました。「仕事が速い＝一人で抱え込む」ことになりがちで、お互いのクラスの様子を語り合う機会が少なくなってしまうように感じてしまうこともあります。そんな時は話題提供や問題提起をして、みんなを巻き込んで考える機会を捻出したりしています。

このような報告を引き受けるにあたり、追い風に助けられながら主体性を持つことができるようになった私には、苦勞して乗り越えたという実感がなく、改革のパイオニアだった大学院の2人の先輩の苦勞話を聞かせてもらったり、原稿を推敲してもらったりしながら、チームカリタス幼稚園の後押しを受けてのプレゼンとなりました。東京サテライトの板橋

の会場では、練習したにもかかわらず、不慣れと緊張のため原稿棒読み状態の私の周辺で、こちらもチーム東京サテライトの皆さんが見守り、いろいろ助け

てくださり、本当にたくさんの方々に助けられて、私は存在していると感謝申し上げます。

探究的な学習を経験した子どものその後

ミドルリーダー養成コース1年/福井大学附属義務教育学校後期課程 佐々木 康順

月間カンファレンスでは、いつも異校種の先生方とお話をさせてもらえるため、いつもと違った角度で物事を考えることができる。私は中学校の教員であるが、今回も小学校、高校、大学の先生と話し合いをするなかで考えさせられたことがいくつかある。その中の一つに、「探究的な学習を経験した子どもは、その後どのように力を発揮していくのか」ということがある。高校の教員を経験された先生が、「高校で探究的な活動をしている様子を見てみると、中学校で探究的な学習をしてきた生徒と、そうでない生徒の差は歴然」とおっしゃっていた。高校に入学した後、みんなで一斉に探究活動を始めるが、話し合いの進め方や課題の設定の仕方などを見るだけで「この子は探究的な学習を経験してきたんだな」とわかるほどらしい。また、別の高校の先生からは、「高校で探究活動に没頭して力を身につけた生徒は、大学に行っても同じような力を発揮している」という話を聞くことができた。大学に進学したある卒業生は、「誰かの研究発表を聞いても、他の学生は『はあ、そうですか』とすぐに納得してしまい、あまり質問をしないんです。でも、私は質問したいことばかり頭に浮かんでくるんです。」と言っていたそうだ。高校の探究的な学習において、アポイントメントを取って直接訪ねたり、質問して自分の研究とつなげたり、地域とつながり課題を見いだしたり、論理的に考え理解した

りする力を身につけた生徒は、大学に行ってもその力を発揮している。こういったことが中学校においても見られる気がする。附属義務教育学校の前期課程（小学校）から後期課程（中学校）に来る生徒の様子を見てみると、話し合ったり、みんなの前で筋道立ててわかりやすく説明したり、これからの見通しをもって行動したりする力がついていると感じることが多い。

以上のように、小学校、中学校、高校、大学と、環境が変わる中で子どもたちがどのように過ごし、どのように活躍しているのかを知る機会是非常に大切だと感じた。長い目で見て、今日の前で学んでいることはどのように生かされていくのかわかってくるからだ。子どもの様子を異校種の先生方から聞くことで、先生方や、子どもたちは現在の学びに価値を見いだすことができるだろうし、モチベーションも上がると思う。

私たち教師が子どもたちにつけようとしている力は、今とは違う環境で発揮されてはじめて「身についた」と言えるのではないだろうか。また、今は「身につけていない」という風に見えても、環境が変わった途端、力を発揮し始める子どももいるかもしれない。そういった長い目で子どもたちを見ていく必要があると感じた。

改革のための「仲間」を探せ

授業研究・教職専門性開発コース 2年/福井市明新小学校 川西 雄太郎

本稿では、10月月間カンファレンスで学んだことや考えたことを踏まえながら、学校改革の在り方に関して論じていきたい。

今回の月間カンファレンスでは、カリタス幼稚園の西川くるみ先生の実践を聞き、グループで意見の交換・検討を行った。グループでは、コミュニティ(教師集団)や学校改革に重要な要素である「自己開示」「課題を共有すること」「世代を超えること」について話し合うことが出来た。

グループで話し合った重要な論点の一つに、「学校改革のきっかけは何なのか」がある。西川先生の実践をはじめ、学校を変えていく実践は、動機はどのようにして生まれるのか、これはあらゆる学校や場所に敷衍できる重要な問いである。以下に、その問いについて少し考えてみたい。

私が考えるに、学校改革のきっかけは「自己開示」「課題の共有」にあると思う。「自己開示」は、同じ組織の同僚が一体どんな人間なのかを知り、また自分が自分の在りようを知らせることで、組織内の連帯を生み出すことにつながる。他方、「課題の共有」は、「このままではいけない、現状を変えなければならない」という意識をもったり、改革の方向性を共有したりするときに重要である。特に後者に関しては、コロナ禍の学校の事例を考えるとわかりやすい。コロナ禍では、臨時休業にあたり、学校にオンライン授業や在宅でできる課題を用意する必要が求められ、学校全体で、コロナ禍でのオンライン授業や課題の模索が行われた。これはまさに、コロナ禍という課題を共有し、それに取り組んだ結果であると言えよう。

ただ、学校改革のきっかけは本当に「自己開示」「課題の共有」なのだろうか。自己開示が誰にでもできるわけではないこと、改革に対する熱量を共有することが難しいことから分かるように、そもそも、

簡単に実行できるものではない。より具体的に言えば、それら二つの取り組みを行うとき、「他者(自分以外のコミュニティの構成員)と改革の必要性を本当に分かち合うことができるのか」「他者とお互いを理解し合うことが本当にできるのか」という大きな難問に必然的にぶつかる。そして、それを乗り越えなければならない。

コミュニティ(教師集団)には様々な考え方をを持った人間が集まる。その中には学校が変わっていく必要性を痛切に感じている者もいれば、「別に困っていないから、今のままでいい」と現状維持を肯定する者もいるだろう。学校の変革という「大きな物語」に全く無関心な者もいるかもしれない。そのような中で、全ての他者と互いを理解し合う関係を築き、改革の必要性を分かち合うことははっきり言って不可能だ。ここから、「自己開示」「課題の共有」をすることをコミュニティの構成員全てに求められないことがわかる。もし求めれば「変革しなければならない」という価値自体をコミュニティ(教師集団)の構成員全てに押し付けることになってしまうだろう。

以上を踏まえると、学校改革のきっかけは「何か新しいこと(「自己開示」や「課題の共有」)をやる」ことには無いのかもしれない。多様なコミュニティの構成員に対し、自己開示や改革の必要性に気付かせる「場」を用意すること、そのような「場」を足掛かりにコミュニティの構成員が学校改革へ乗り出すことを粘り強く「待つ」こと、そのような態度に学校改革の本当のきっかけがあるのではないかと。

それは当然、相当の粘り強さが求められる態度であり、一人では立ち行かないものである。だからこそ学校改革には同じ改革を志向する「仲間」が必要である。「仲間」がいれば、たとえ「仲間」と場所や状況は違っても、改革の必要性を分かち合うことができ

るし、励まし合うこともできる。学校改革は「仲間」を見つけた瞬間から静かに始まるのかもしれない。

対面での対話を楽しみ、自身の実践を振り返る

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校前期課程

太刀川 京

今回の10月の月間カンファレンスは、大学院に入学して初めて対面での参加という形をとりました。朝目覚めたのが9時10分。今日はズームで・・・いやいや対面で参加だから急がないと！と慌てて9時30分に間に合うように福井大学文京キャンパスまで自転車を全力でこぎました。

対面でのカンファレンスはオンラインとは違い、話すターンをうかがうことなく自由に話せるということがとても心地よく感じました。報告を聴いている中でふと疑問に思ったことをその場で共有し、より実践を振り返ることができることを実感しました。

さて、カンファレンスの内容については、グループが同じだった野口先生の2つの言葉がとても印象に残っています。1つ目は『失敗した、上手くいかなかったことは自分が1番よく分かっている』ということです。大学時代での授業観察の仕方、そして先日の教育実習での授業検討会を見ていたときに思ったことでもあります。授業を参観し、〇〇が良くなかった、A君は何もしてなかったけどそれってどうなの？など授業に対する否定的な見方が強かったように感じます。「言うは易く行うは難し」なのです。授業の参観の際、授業者がどのようなことをねらって組み立て発問したのか、授業者に寄り添ってみることが自分は特に大切だと考えます。うまくいかなかったという感情は自分自身が誰よりも分かっているはずで、これは、教師の授業観察だけでなく子どもの上手くいかなかった時の指導にも同じようなことが言えると思います。「なんでできないんだ」「あの時なんでこうしなかったんだ」など教師がそのような声か

けをするのはよくありません。「なぜそのようになってしまったんだろう」「どうすればよかったと思う？」といった共に考え、その子の気持ちに寄り添うことが大切だと思います。

2つ目は「教育は共育である」ということです。教育は教員が全てできることではなく生徒と共に成長していけばよいといったことを話されていました。生徒のICT機器の使い方をみて教員が学ぶ、若い世代がICT機器に必ずしも詳しいわけではなく学校全体で学ぶ姿勢などの具体例からも共育という言葉がとてもしっくりしました。自分自身の実践に落とし込んだとき、授業での子どもの発言のやり取りを真っ先に思いつきました。子どもの発言が全て自分では分かるわけではありません。この子はどんな思いでこのような発言をしたんだろうと自分で考えて全体に自分が共有するのではなく、この子の気持ちが分かる人？といった聞き方をすることで子ども達と共に発言した子の気持ちを学ぶのです。4月当初の実践においてはどうしても自分でなんとかしないと！という気持ちが先走り、自分主体となって授業を進めていました。今もそのように進めてしまうことがあるため、子どもと共に創る授業を、先生方の授業を参観し自分の授業実践に取り入れ振り返り改善し実践するという流れで学んでいます。

他校の先生方、そして世代を超えた合同カンファレンスのような場はとても楽しく勇気をもらいます。自分も若い時は～、なるほど若い世代はそのように考えているのか、ベテランの先生方もそのような悩みを抱えているのかといった共有する場は合同カン

ファレンス以外の場で設けることはできないのでしょうか。教職大学院を卒業したらそのような場はもう無いのでしょうか。世代を超えて話す場がずっと

あり続けると良いなあと感じた10月の合同カンファレンスでした。

Schedule

11/13 Sat.	月間カンファレンス A 日程	11/13 Sat.	東京ラウンドテーブル
11/20 Sat.	月間カンファレンス B 日程	11/21 Sun.	奈良ラウンドテーブル
12/26 Sun.	第2回大学院入試説明会		
12/26-28	冬期集中講座 A 日程	2022/1/4-6	冬期集中講座 B 日程

Newsletter は、教職大学院に関わる皆さんの協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】今号にも新しいスタッフの自己紹介が続きます。また、ミドル・マネジメントだより、カンファレンス報告など寄せていただいた原稿からは、皆さんの現場での葛藤、変容してきた様、教育に対する考えをまざまざと感じさせていただくことができます。お忙しい中での原稿執筆に恐縮するとともに、皆さんが真摯に子ども達と向き合ってくださっていることに感謝いたします。

(T・T)

教職大学院 Newsletter **No.153**

2021.11.29 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp